

聖書：ヨハネの黙示録 8：6～13

説教題：最初の四つのラッパ

日時：2021年3月14日（朝拝）

今日から7つのラッパの幻が記されます。これまでは7つの封印の幻について見て来ました。この両者の関係は前回触れましたように互いに並行関係にあります。どちらの幻も最初の4つは1セットになっていて、その後、第5、第6の幻が記され、第7の幻の前に比較的長い挿入部分があります。そして最後の第7の幻はいずれも主の再臨の日の出来事を描いています。ですからこれらの幻はいずれも同じ期間、すなわち主の復活から再臨までを違った視点から、別の側面を浮き彫りにする仕方です。それはこのような多面的な描写を通して、私たちが今の時代の意義をより良く理解し、主の御心に従って生きる者となるためです。

さてこれから見る7つのラッパの幻の特徴は何でしょうか。ここではこの世に対する神のさばきが描かれますが、それらはあの出エジプト記におけるエジプトへの10の災害を思い起こさせる仕方です。主はエジプトからイスラエルを救い出すにあたって様々なみわざを行われました。水を血に変えたこと、また蛙、ブヨ、アブ、疫病、腫れもの、雹、いなご、暗やみ、最後は初子の死。エジプトの王ファラオは、これらを見ても心を頑なにしておいてイスラエルを行かせませんでした。そのため、これらの災いが次々になされることを通して主なる神こそまことの主であることが示されました。その上でイスラエルは救い出されます。あの出来事と重ね合わせる仕方です。

もう一つこの幻を見る前に押さえておきたいのはラッパの意味です。なぜラッパでしょう。旧約聖書を見ると、ラッパは民が聖なる会合に集まる合図として、また王の油注ぎの時に、あるいは戦いへの招集合図などに用いられています。そんな中、今日の箇所と特に関係すると思われるのはヨシュア記6章におけるエリコの行進です。約束の地に入る時、イスラエルは主の命令に従い、ラッパを吹いて1日1回エリコの町の周りを行進しました。そしてそうすること7日目、エリコの城壁は人の手によらず崩れ落ちました。あの時のように、ここに臨在され、第7のラッパにおいてついに完全な勝利と救いを与えてくださる神。そういうイメージがこのラッパにはあると考えられます。

では一つ一つの幻について見て行きます。まず第1のラッパについて7節：「第一の御使いがラッパを吹いた。すると、血の混じった雹と火が現れて、地に投げ込まれた。そして地の三分の一が焼かれ、木々の三分の一も焼かれ、すべての青草も焼かれてしまった。」 雹と火が投げ込まれる災いは出エジプトの第7の災いとして出エジプト記9章22～25節に出て来ます。9章23～24節：「モーセが杖を天に向けて伸ばすと、主は雷と雹を送ったので、火が地に向かって走った。こうして主はエジプトの地に雹を降らせた。雹が降り、火が雹のただ中をひらめき渡った。それは、エジプトの地で国が始まって以来どこにもなかったような、きわめて激しいものであった。」 続く25節には雹はエジプト全土にわたって人から家畜に至るまですべてのものを打ったこと、野の草も、野の木もことごとく打ち砕いたことが記されています。果たしてこれは何を現しているのでしょうか。注意すべきは、黙示録に記されているのはヨハネが見た幻であって、それはビデオカメラで撮ったような実写映像ではありません。多くは象徴をもって描かれています。ですから文字通りに取ることには注意が必要です。大切なことは必要以上に詳細に立ち入らず、まずは全体的・一般的に受け止めることです。

この後の第二、第三、第四のラッパとの比較から考えると、第一のラッパの災いは地の上に臨むさばきを象徴しているようです。その1/3が焼かれると言うほどの荒廃、また混乱状態が生じます。「木々の1/3も焼かれ、すべての青草も焼かれた」とは、果物や野菜が不足し、食糧難に陥ることを意味するのかもしれませんが。先の7つの封印の幻では、第3の封印において飢饉が生じることが示されていましたが、それと同じような状況を指すのかもしれませんが。人は地の上に住み、地から取れるものに依存して生活しています。その生活が脅かされるのです。その生活に困難や苦しみが生じるのです。

その手段としての雹と火については文字通りに取る必要はないと思います。出エジプトの時は雹と火がエジプトの作物などを打ちました。あの時のような地に対する災いが生じるということを言っているだけです。この終わりの時代に地に生じる災いは、あのエジプトで神が雹と火を通して地をさばかれたみわざに対応するということです。今日それは自然災害という形で地に生じるのかもしれませんが。あるいは「血の混じった」という言葉がここに加えられていますが、血は第2の封印におい

て戦争や暴動による流血を暗示するものとして出て来ました。ですから戦争等を通して地の上に災いや荒廃が生じるという意味があるのかもしれませんが。いずれであれ、それらは神のさばきの御手として起こるということが言われています。

第二のラッパについては8～9節：「第二の御使いがラッパを吹いた。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血になった。また、海の中にいる被造物で、いのちのあるものの三分の一が死に、船の三分の一が壊された。」 この災いは出エジプト記7章20～25節に記されている第一の災いに相当します。7章20節：「モーセとアロンは主が命じられたとおりに行った。モーセはファラオとその家臣たちの目の前で杖を上げ、ナイル川の水を打った。すると、ナイル川の水はすべて血に変わった。」 この第二のラッパの幻が示していることは何でしょう。こちらも前後の幻との比較から考えると、海と海の生活に臨むさばきを象徴しているようです。人間は地の上にあるものにだけ依存しているのではなく、海と海の資源も大事です。そこで採れる魚や海産物に、その食生活は支えられています。また海を通して多くの産業が成り立っています。ここに「船の1/3が壊された」とあります。当時の地中海世界において船は商業の象徴でした。海を通して船は遠くから多くの物資を運んで来ます。このような海と海にまつわる人々の生活に危機的な状況が生じるのです。

8節前半には「火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた」とありますが、これが何を象徴するかについては議論があります。多くの学者は、大きな山は聖書で大国や帝国を指すために用いられていると言います。エレミヤ書51章25節では当時の世界帝国バビロンが山にたとえられ、こう言われていました。「全地を破壊する、破壊の山よ。見よ、わたしはおまえを敵とする。――主のことば――わたしはおまえに手を伸ばし、おまえを岩から突き落とし、おまえを焼けた山とする。」 黙示録が書かれた1世紀ではローマ帝国を意味したでしょうか。そのように神に逆らっておごり高ぶる国へのさばきがここに暗示されている。それとセットで海に臨むさばきが述べられていると学者たちは言います。

第三のラッパについては10～11節：「第三の御使いがラッパを吹いた。すると、天から、たいまつのように燃えている大きな星が落ちて来て、川の三分の一とその水源の上に落ちた。この星の名は『苦よもぎ』と呼ばれ、水の三分の一は苦よもぎ

のようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人々が死んだ。」 ちらは前後と比較すると、川とその水源に生じる災いを象徴するようです。先の海に臨むさばきと「水」という点では似ていますが、こちらでは飲み水に災いが生じることが特に言われています。水は新鮮でなければ飲めません。エジプトでも先の災いとセットで出エジプト記 7 章 21 節に「エジプト人はナイル川の水を飲めなくなった」とありました。さてここでは水が苦くなった理由として、天から燃え落ちた大きな星があること、その星の名が「苦よもぎ」であることが述べられています。興味を引く話は 1986 年にソ連ウクライナでチェルノブイリ原発事故が起りましたが、あのチェルノブイリという名前はウクライナ語あるいはロシア語で「苦よもぎ」を意味するという主張があることです。そこである人はこの黙示録 8 章 11 節はあの原発事故を予言していたのだ！あの事故において第 3 のラッパは成就したのだ！と主張します。このような黙示録の読み方をしたがる人たちがいますが、これが正しいとすると、ここはヨハネの黙示録が書かれた 1 世紀から約 1900 年間の人々にはほとんど関係のない話になってしまいます。また今日の私たちにもすでに過ぎ去った出来事を指しているということしか意味を持たない御言葉になってしまいます。そういう風に読むことを黙示録は意図していません。

では 10 節の「天から、たいまつのように燃えている大きな星が落ちた」とは何を意味しているのでしょうか。大きな星が燃えながら天から落ちるという表現で思い起こされるのはイザヤ書 14 章 12～15 節です。「明けの明星、暁の子よ。どうしておまえは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしておまえは地に切り倒されたのか。おまえは心の中で言った、『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』だが、おまえはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」 ご存知の通り、この御言葉はバビロンへのさばきの言葉として語られています。ですからこれも 8 節と同様、神に逆らっておごり高ぶる国へのさばきを述べていると理解することが可能です。そしてこの神を退けた国の民として生きる人々に「苦い水」で象徴されるさばきが下る。水は人間の生活に欠かせません。その水が苦かったらどうでしょうか。黙示録によると、多くの人々はそのような苦い水を毎日飲んでいるような生活をしている。神を退けるこの世の文化のもと、あらゆる生活の場面で人生の苦さ、まずさ、苦しさを味わっている。そこに神のさばきの御手が現れているということです。

第四のラッパについては12節：「第四の御使いがラッパを吹いた。すると太陽の三分の一と、月の三分の一、また星の三分の一が打たれたので、それらの三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、夜も同じようになった。」これは前の3つと比較すると、空または天体に生じる災いを示しているようです。出エジプトの災いでは第9の災いに相当します。モーセが手を伸ばすとエジプト全土は3日間、真っ暗闇となりました。この第四のラッパの幻では1/3が暗くなったとされています。光がそれだけ暗くなれば、地上の生命活動には大きな混乱が生じるでしょう。その状況にたとえられるような災いが臨むということです。そしてこれは特に霊的な暗さを暗示していると思われます。光が失われるとは光の根源である神との交わりが失われ、神からの祝福が失われることを意味します。天体の光が失われても人工の光で明るくすることはできるかもしれません。しかし神からの光、神からの祝福は失って行く。人生にあらゆる暗さが付きまとう。そういうさばきが言われていると考えられます。

以上、最初の4つのラッパの幻について大まかに見て来ました。この4つがセットであることは、第5、第6へと進む前に、13節が挟み込まれていることから分かります。13節：「また私は見た。そして、一羽の鷲が中天を飛びながら、大声でこう言うのを聞いた。「わざわいだ、わざわいだ、わざわいが来る。地上に住む者たちに。三人の御使いが吹こうとしている残りのラッパの音によって。」「わざわいだ」が3回繰り返されているのは、この後の第5、第6、第7の三つの残されたラッパの災いを指しているのでしょうか。その前にこうして警告されているのは、この後の災いがさらに恐ろしいものだからでしょう。ここからまとめとして最後に二つのことを述べたいと思います。まず一つ目ですが、今日の箇所にはこの世界に生じる様々な災いのことが述べられました。大地に、海に、川や水源に、空や天体に。これらによって、この造られた世界全体に生じる様々な災いがある意味で網羅されていると考えられます。私たちはこれらの様々な災いに接した時、どう思うのでしょうか。私たちはそれらを単なる自然災害としてだけ見るかもしれません。神学的には中立の出来事、神の前では特別な意味を持たない出来事として。しかしそうではないことを今日の箇所は示しています。聖書によれば自然的な災いというものには本来ありません。この世界は非常に良いものであり、災いと無縁でした。あらゆる災いは罪の結果としてこの世に生じたものだと聖書は述べています。とするならどんな災い

であれ、それらが地に見られる時、私たちはそこに明確なメッセージがあると思わなければなりません。この世は何事もなくいつまでも続いて行くところではありません。人々はこの世がいつまでも平和で、みんなが仲良く、みんなが成功して、みんなが笑顔である場所であるようにと願うでしょうけれども、そうは行かないというメッセージが様々な災いに示されています。確かにまだ最後ではありません。今日の箇所でも 1/3 という言葉が繰り返されていました。神のさばきはまだ部分的です。そして 13 節にある通り、これからさらに大きなさばきが来ると警告されています。ですから私たちのすべきことは、このメッセージを読み取って早くに悔い改めることです。やがてこれらの災いが指し示す、より恐ろしい最後のさばきが来ます。その前に、自分の将来のために正しい備えをするように。神がくださった救い主を信じ、その方であって罪の赦しを受け、神との正しい関係に立ち返るように。そして来たるべきさばきを逃れ、救いを得る民となるようにと。

そしてもう一つは今日の箇所は根本的には神の民への慰めとして語られているということです。13 節に災いが来るのは「地上に住む者たちに」と言われています。これは黙示録では神を信じず、神に逆らって生きるこの世の人々を指す表現です。神の民がこのさばきから除外されていることは次回見る 9 章 4 節からも分かります。額に神の印を持つ人々、すなわち 7 章で見た通り、神の民である者たちはその対象ではありません。ですからこのラッパのさばきは神を信じない世に対するさばきを述べたものであると分かります。このことは重ね合わせて語られているエジプトの 10 の災害を思い起こしてもそうです。様々な恐ろしいみわざがエジプトで行われましたが、イスラエルはそれによって害されませんでした。それはむしろイスラエルをエジプトの縄目から救い出すためのものでした。つまりヨハネは、あのエジプトで神がなされたことは今日神が様々な災いを通してなされていることと同じだと告げているわけです。ですから私たちはこれらの災いを見て、世と一緒にあって恐れなくて良いのです。このことは以前も述べた通り、私たちが必ず肉体的に守られるとか死なないという意味ではありません。私たちも外面的に苦しみに巻き込まれることはありますし、殉教もあり得ると言われています。しかしこの黙示録が述べていることは、神の民は真の救いに至るように守られるということです。ですから様々な災いが起こった時、それはこの世へのさばきを意味し、警告を意味するけれども、主を信じる者にとっては救いを意味していると心に留めたいのです。神はエジプトにおける数々の災いを通して「わたしの民を行かせよ！」とファラオに言われまし

た。同様に今日この世で行われている神のさばきのわざは、ご自身の民を新天新地へ導き出すためのものであり、言うならば救いの序曲のようなものとさえ言えるのです。

ですから私たちはあらゆる災いのただ中で慌てることなく、むしろ頭を上を上げる者とされたいと思います。イスラエルの民がエジプトでなされた様々な神のみわざに神の救いの行動を見たように、私たちもその神が今日も生きて働いておられるしるしを見て取る者へ、そして心に平安を深くいただいて主に忠実に歩み、主を証しし、主の力によって救いの完成に到達させていただく歩みへ、と導かれて行きたいと思えます。